

# 幼児のころ

滝口俊子

家族で紅白歌合戦を見ていた、昨年の大晦日の夜のこと、中学三年生の次女が突然、

「恵美ね、新沼謙治のお嫁さんになろうって、幼稚園の頃、決めていたの」と言いました。

「どうして？」と、びっくりして私。

「あの頃、新沼謙治が『お嫁においで』ってテレビで歌っていたでしょ。だからお嫁にいつてあげようって思っていたの。」

何とも愛らしい発想に、私の心は和みました。

そしてこの事をきっかけに、慌ただしい日ごろの生活では思い出すことの殆どなかった、三人の子供達の幼かった日々のが、あれこれ思い浮かんで参りました。

もっとももっと大切に、子供とのあの頃を過ごしておくのだったと、懐かしさと、ちょっぴり後悔を感じます。

そして、幼児の親をもう一度やり直したい思いになりますが、叶わない夢でありましょうから、その分も心理臨床の場であ会うお子さんたちや、附属幼稚園の園児たち

の、良き発達促進的な環境になれるよう努めたいと思います。

永年ひそかに憧れていました『幼児の教育』に執筆させていただくこのチャンスに、三人の我が子の幼い頃の事を記すことをお許しいただき、未熟親のせめての償いと思いたいと思います。

### ママの洋服

長女は、私が大学院を修了した年の秋、生まれました。いくらか分かりかけてきた心理臨床の仕事は捨て難く、と言って、「普通のお母さん」になることを当然と期待している夫を始め周囲の人々の思いに逆らうことにも抵抗があり、数ヶ月間、悶々と過ごしておりました。

こんな母親の不安定な気持ちを感じとってか、よく泣く赤ちゃんで、当時の育児書の「抱きぐせをつけないように」という言葉を気にしいしい、日中は始終だっこをしておりました。右手で抱いて、左手で本を支えて読ん

でいましたので、抱かれた子の心も満たされてはいなかったのでしょうか。間もなく、立って抱かないと泣き続けるようになり、本を立てるために指揮者の使うような譜面台が欲しいと、まじめに考えたりもしました。

やがて、「いいお母さん」という周囲の目にとられるより、自分自身としての連続性を取り戻すことを決断しました。しかし、葛藤はすぐに解決出来るものではなく、時には「早すぎた子」という思いを抱き、罪悪感に苦しんだりもしました。

あちこち保育所を探した後、当時はまだ開けていなかった埼玉県の志木の家から、東京の杉並の実家まで、早朝に長女を運び、夜連れて帰るとい生活を始めました。

ひとつ年上のいとこや、子供の扱いの上手なお手伝いのいる実家での生活に、娘はすぐに馴染んだように見えましたし、次第に私も気持ちに落ち着きを取り戻す事が出来ました。我が子を、心から「かわいい」と感じられるゆとりを持ったのも、この頃からのことです。

ヨチヨチ歩きが出来るようになり、片言を話すようになった娘にとって、いとこと遊べる杉並の生活が何にもまして楽しいものと信じこんで、もっと研究に身を入れたいと考え始めていた私にとって、思ってもいなかった事を聞きました。

昼間は元気に遊んでいる娘が、夕方になると、たんすの上に私が脱ぎ捨てた普段着を、背のびして引っぱりおろし、大事そうに抱きかかえているというのです。

「俊子のような親でも、やっぱり母親がいいのねえ」とへんな感心を里の母にされながら、学会で地方へ出掛けるような事も増えていきました。

このエピソードを思い出すと、私の胸はキュンと痛みます。もっと、しっかりと暖かく、ゆったりと力強く、心地好いだっこを充分に経験させてやればよかった！

ママ もっとやさしく

次女が、幼稚園の終わりのころ話してくれたことに、

こんな事がありました。

「ママ、恵美はね、「ママがもっとやさしければいいのに」と思ったことがあるの。」

ずっと前、大きな荷物を背中にしょったおばさんが、お庭に入ってきたことがあるでしょ。お餅や野菜をしょって、両手に植木鉢さげて入ってきて、大きな荷物をヨイショって降ろして、「買って下さい」って言った時、ママに「間にあっていますから、いりません」って言ったでしょ。恵美、あのおばさんがかわいそうで、涙がでちゃった。ママ、親切にしてあげればいいのかに思って思ったの。」

この事と直接の関係はないかと思いますが、次女が字を覚え始めたころに書き付けたものに、

「きみの きみの かなしみ さようなら

この かなしみに さようなら

ぼうとにのって いっちゃった」

という言葉があります。

幼な子の柔らかな心が感じていることを、知らず知らずのうちに踏みつぶして、ずいぶん悲しい思いをさせていたのではないかと、今になってしみじみと思います。

ママとお風呂

長男の誕生は、娘達二人の育児経験によって母性の開発されてのことなので、ゆとりをもって迎えることができました。出産の当日も、長女のプラネタリウムの見学に付き添う予定でいたほど、妊娠の末期まで元気に動いておりましたし、出産も、無痛分娩のせいもあり、楽しい思い出として心に残っています。

そんな息子との、まだ、だっこをしてお風呂に入れていた頃のことです。湯舟のまわりのタイルに貼ったシールの、熊ちゃんやうさぎさんを見ながら、おしゃべりをしていた時、息子が突然、

「ママ！ ママのお目々に、あっちゃんがいる！」

私も、しっかりと息子を見たら、息子の小さな瞳に、

私映っていました。

忘れられないシーンです。

息子が三つになった頃には、

「ママ、人間はどうして生きられるの？」と尋ねられて、びっくりしたことがありました。

深く感動しながら、「ごはんを食べて、運動して、それから、神様が守って下さっているから」と説明をした日のことが、昨日のようにも、遠い遠い昔のことのようにも思い出されてまいります。

パパ

未成熟ママに比べると、大勢の姪や甥と身近に接触していたパパは、「赤ちゃんは眠くなると、手が暖かになる」というような事も知っているベテランでしたので、とてもおおらかに自然に、子供の相手をしていました。

長女は赤ちゃん時代から、パパが帰るまで眠らないで

待っていましたし、次女も食事中まで肩車をねだるほど、パパが大好きでした。

軽々と、しかもしっかりと抱き上げてくれるパパの腕の中にいることは、子供の心をすっぽりと満たしてくれる、安定感の体験だったと思います。

パパを大好きだったのは、息子も例外ではなく、娘達同様、息子の最初に覚えた言葉も、「パパ」でした。

パパの家にいる休日は、朝早くから、「パパ」「パパ」を連発し、パパの後についてまわっていました。嬉しくってたまらない様子は、見ている者まで楽しい気分になせられました。

ちょうどその頃、祖父（洋画家）が絵のモデルに飼いだめたカラスまでが、息子の声を真似て、「パパ」「パパ」とソプラノで鳴くようになった程でした。

子煩悩な夫ではありませんが、働き盛りの宿命で、休日以外は子供と過ごす時間はありませんでした。パパがいる時としない時とは、子供の表情の張りが全く違うので、出来るだけ子供との時間を作って欲しいと、度々頼

んだものでした。

夕方、五時に仕事が終わって、六時には家族そろって食事が出来るという、かつての日本の当たり前の生活に戻ってきたなら、子供達の心の安定にもっと良い影響があることと、私は確信いたします。

#### 母なるもの

乳幼児のころにとって、大切な母性の機能として、英国の優れた精神分析家であるD・W・ウィニコットは、

- 1 抱っこすること (holding)
- 2 あやすこと (handling)
- 3 対象になること、ないしは現実化すること（つまり幼児の創造的衝動を現実のものとすること）(object-presenting) を主張しています。

そして、「要するに、情緒発達は、成熟過程のもつ遺伝性と生きる体験の積み重ねの問題ですが、発達促進的

環境 (Facilitating environment) なくしては起きないものです」と言い、「さらに、発達促進的環境は、最初のうちは絶対的に、次第に相対的に重要」と述べています。

子供達の一生にとって、そんなにも重要な役目であるママとしての機能、もっともっと心を込めて担うべきであったと、子供達に申し訳なく感じるこのごろです。

(立教女学院短期大学)

#### 引用文献

D・W・ウイニコット著 牛島定信監訳

「子どもと家庭」 誠信書房 一九八四年

